

「自分の十字架を背負って」
マタイによる福音書 16 章 13-28 節

人々の間でイエスさまの評判が高くなっていくと、次第にイエスさまのことを預言者エリヤだとか、エレミヤだとか、洗礼者ヨハネだなどと言う人が増えていきました。そのようなときに、イエスさまは弟子たちに問われました。「では、あなたたちはわたしのことを何者だと思ってついて来ているのか」と。その問いに対して「あなたはメシア、生ける神の子です」と、まっさきに答えたのはペトロでした。ペトロは、人々がイエスさまのことを預言者の一人として見ていたときに、「あなたは私の救い主です」と告白したのです。

預言者と救い主では意味がまったく違います。預言者は、私たちの人生に道を教えてくれたり、渇いた魂を潤す泉のありかを教えてくれる存在です。人生に行き詰まって生きる道を失った人々に、あるいは間違った道を突き進んでしまっている人々に「神さまの道はあそこにある」と教えてくれる声、それが預言者です。それに対して、イエスさまは「声」ではなく、「道であり、真理であり、命」です。預言者たちが指し示す命の道そのものなのです。

ペトロは、その主イエスこそ、約束され、待ち望まれた「救い主メシアであり、生ける神の子、まことの神」であるという信仰をここで言い表しました。そして、イエスさまは、このペトロの信仰の告白をととても喜ばれました。

「このときから」(21 節)、つまり弟子たちに蒔かれた信仰の種が芽を出し、ペトロが信仰を告白したときから、イエスさまはご自分の受難について話し始められました。しかし、このことは、弟子たちにとって理解し難い、受け入れ難いことでした。メシアの受難予告を聞いたペトロは「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」(22 節)と、イエスさまに言ったのです。ペトロは「あなたはメシア、生ける神の子です」と信仰を告白した人です。しかし、そのペトロが、ここではイエスさまの言葉を否定したのです。いさめたのです。つまり、イエス・キリストへの信仰を告白したペトロでも、キリストの受難の予告を理解出来なかったのです。

ペトロをはじめ弟子たちは、イエスさまこそローマの支配からイスラエルの民を解放してくれる英雄、かつてのイスラエル王国を回復してくれる救い主だと思っていました。ところが、イエスさまは、自分たちの期待に反して、人々から捨てられ殺される苦難のメシアとしての道をご自分の口から告げられたのです。それをペトロは、そんなことがあってはならない、あるはずがないと考えたのです。このペトロの想いと行動は、イエスさまにとっては人間の想いであつたのです。ペトロは、自分の想いや自分の願い、自分が良いと思っていることに基づいて行動をしたのです。それゆえイエスさまをたしなめようとしたのです。

それに対してイエスさまは、「サタン、引き下がれ」と言われます。この言葉は、直訳すると「退け、サタン、わたしの後ろに」となります。ペトロは、イエスさまの前に立ちただかる者となっていました。イエスさまは神さまの御心をお話しになっているのに、ペト

口は自分の想いや願いをイエスさまに押しつけようとしてしまっていたのです。ですから、イエスさまは、もう一度、私の後ろに引き下がちなさいと言うのです。また、この「私の後ろに」という言葉は、かつてイエスさまがペトロを弟子にするときに言われた「わたしについてきなさい」(4:19)という言葉の中にもありました。この言葉も直訳すると、「従いなさい、私の後ろに」となります。つまり、「サタン、引き下がれ」という言葉は、決してペトロを退けたということではないのです。そうではなく、イエスさまは、「わたしの後ろからついてきなさい、従ってきなさい」と、ペトロを再度従うように招いてくださっているのです。

そのようにしてイエスさまは、ご自分の後ろに従ってくるように弟子たちを招かれながら十字架の道を進んで行かれます。それは私たちの命を買い戻すためでした。26節には、「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」とあります。私たちは、自分ではその代価を支払うことは出来ません。その代価は、神さまだけが支払うことが出来るものなのです。また、支払ってくださったものなのです。

神さまが私たちの命の代価を支払ってくださった。それが、主イエス・キリストの十字架の死です。キリストの命が、私たちの命のための代価として支払われたのです。このことによって神さまは、私たちをあがない、死の力から取り戻してくださったのです。この命を生きることこそ私たちが背負う自分の十字架に他なりません。